

産業のみち

■ 近世以前の産業のみち

全国的に名高い生野鉱山は、室町後期、山名祐豊の領主時代に盛況期を迎えるが、祐豊はその悪臭を嫌い、生野での精錬を禁止した。そのため生野で採掘された鉱石は、猪篠や大山などの近隣の村々をはじめ、多可町や遠く丹波地域の村々まで搬出して精錬された。猪篠にはこの吹屋敷が数ヶ所あり、四角に固めたカラミ石はその名残である。そして、生野鉱山から猪篠へと鉱石を運んだ道が古坂峠である。峠道は白岩山の裏（東側）に位置しており、かつて鉱石を背にして何度も通い詰めた峠道は、現在ハイキングコースとして残っている。

また、その他にも、千町峠を介して川上区と宍粟市一宮町千町とを結ぶ峠道では、千町方面から炭俵を長谷の問屋に運ぶために利用され、「市原坂のひだる」の民話が残る新田区と多可町市原とを結ぶ市原峠越えの峠道では、新田区から和紙の原料となる三桠や生産されたこんにゃく玉などが出荷され、作畠区白口坂の道端には「右 あいさわ、左 いくの 道」と記された道標も残る。

このように、近世以前から、山間には数多くの峠道が通り、街道や市川の筏や高瀬舟による水運などとともに地域間の物資の運搬の中心を担い、道端に残された道標や地蔵などからは、当時、多くの人々が往来していたことをうかがい知ることができる。



作畠区白口坂道標

■ 播但鉄道の開通と牛市場・炭市場

明治期に始まる新道づくりや旧道の拡張整備に伴い、物資の輸送手段も牛馬から荷車や牛馬荷車へと移る（※生野鉱山寮馬車道については 113 頁で解説している）。そして、明治 27 年（1894）7 月、姫路 - 寺前間に播但鉄道が開通すると、物資輸送の中心を鉄道が担い、当町域で産した木材をはじめとした農林産物や生野鉱山からの鉱山関連物資の輸送などに利用された。

市川支流の河川による谷筋が集まる谷口一帯は、但馬街道や生野鉱山寮馬車道が通る中村・粟賀町のように、古くからの地域の経済的な中心地として栄えてきた地域であり、播但鉄道が開通すると、寺前には家畜市場、新野には炭市場が設置され、全国各地から買主が集まる物資の集積地として栄えた。寺前家畜市場では、宍粟郡や多可郡からも山越えで背に餌ワラを括りつけた子牛が引いて来られ、買い付けられた子牛は鉄道網によって全国各地に送られた。また、新野の炭市場では、大正 10 年（1921）頃、品質改良によって名声を高めた木炭（白炭）が寺前や長谷等の町内各地から集積し、大正 14 年（1925）頃には、運送上の利便性を背景に他郡をしのぐほどの活況を呈し、買付人が泊まる宿屋などもあったという。



寺前-長谷駅間を北上する蒸気機関車

■ 林道の整備

近代以降、林業を基幹産業のひとつとして繁栄してきた当町域では、山林内に数多くの林道が整備されている。特に、戦後には木材需要の増大に伴い森林所有者から木材生産基盤としての林道開設の要望が増加して多くの林道が整備され、平成 17 年（2005）時点で、旧大河内町域で総延長 38.2km（23 路線）、旧神崎町域で総延長 60.6km（25 路線）が整備（又は整備中）である。

これらの林道のうち、大河内高原内の林道や新田ふるさと村周辺などでは、林業施業の利用だけでなく、観光地点へのアクセス道や遊歩道、登山道などの観光用道路としての役割も果たしており、新緑や紅葉、滝などの豊かな自然風景を享受できる場となっている。

【参考・引用文献】『聖岡の里 おおかわち』（平成8年10月、大河内町教育委員会）
『大山の郷 いろいろばた』（平成20年11月、「大山の郷 いろいろばた」編集委員会編）
『兵庫の森林土木史』（平成17年12月、社団法人兵庫県治山林道協会）

生活のみち

■ 近代以降の交通の発展

神崎郡における明治以前の交通手段は、街道や峠越の小道、市川の水運利用が主であり、通信手段は飛脚が主であったが、明治期に始まる新道づくりや旧道の拡張整備は、荷車や牛馬荷車などの使用を促し、明治 10 年（1877）頃には人力車が登場するようになった。当初の人力車は、実用よりもむしろ娯楽の一種として用いていたようであり、大型の 2 人乗りが多く、朱塗や蒔絵を施したものなどもあったという。『神崎郡誌』には、大正 9 年（1920）の人力車里程賃金表がみられ、寺前駅を起点に町域の広範に向かうことができたことが分かる。明治 27 年（1894）に播但鉄道が開通した後、大正時代の中頃から鶴居駅と中村の間を乗合馬車が、また大正時代の末期には中村をもとに越知・寺前間を乗合自動車が走るようになった。そして、昭和に入ると乗合バス（神姫バス）が姫路-粟賀間を走るようになった。

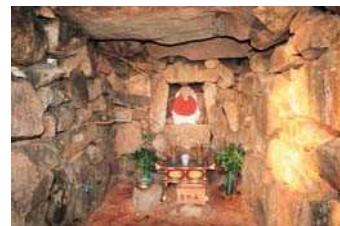
出発地	到着地	里 程	晝 間	夜 間
寺前驛	鶴居迄	一里十三丁	五拾六錢	六拾四錢
	長谷迄	二十丁	六拾貳錢	七拾錢
	福本迄	三十三丁	五拾五錢	四拾壹錢
	福賀迄	十二丁	五拾五錢	六拾六錢
	大山迄	十丁	八拾五錢	九拾參錢
	法樂寺迄	十五丁	五拾六錢	六拾四錢
	追上迄	一丁	壹圓	壹圓
	小原迄	十六丁	九拾五錢	拾肆錢
宮野迄	二十五丁	壹拾錢	壹圓	壹圓
越知迄	二十丁	壹圓參拾錢	壹圓	壹圓
宇野迄	十六丁	九拾五錢	壹圓拾捌錢	壹圓拾捌錢
一里二村	参拾五錢	夜間	一里二村	四拾參錢
一里七切		夜間	一里七切	半日七切
待合一時間毎			壹圓四拾錢	
人 乘	五 割 増		一人曳八	
一里半ノ距離ハ左ノ割合ニヨル			一人曳二倍	
五町以内金武拾壹錢			兩雪泥ノ際ハ	
二十町以上八十五疊又每ニ參錢増			二十町以内金武拾一錢	

「神崎都誌」

人力車里程賃金表(大正9年4月改正)

■ 村々のつながりを物語る「お嫁さんロード」と「医者どん道」

旧大河内町には、古くから山を越えて隣の村との交流を伝える道が残る。その一つが、通称「お嫁さんロード」と呼ばれる道であり、隣村との婚姻関係を伝える。「上小田～一宮（宍粟市）道」「為信～南小田道」「川上～福知（宍粟市）道」「大河～吉富道」の4つの道が確認されている。また、このうち「大河～吉富道」は、通称「医者どん道」とも呼ばれ、かつて大河区から木下順庵という医者が、飛山の山腹の険しい山道を籠に乗って、吉富や東柏尾（三万田）へと山越で往診に来ていたという。峠の途中には約一坪ほどの石積みの祠があり、「坂の地蔵さん」と呼ばれる地蔵が祀ってある。



坂の地蔵さん

■ 信仰の道

信仰に係る道として、当町域には西国三十三所巡礼の道筋が通る。三十三所巡礼は、「法華経」観世音普門品に説く三十三の化身を現して、衆生濟度を行う観世音菩薩の化身数にちなみ、三十三所の聖地が札所として定められている。『国史大辞典』の「三十三所観音」の項（伊藤唯真氏稿）によると、三十三所巡礼は遅くとも12世紀には修行僧により行われていたことが判明しており、これが中世を通じて庶民の間に浸透し、近世に入って一段と発展したと考えられている。なお、鎌倉期に坂東（関東地方）にも三十三所が成立したことから、近畿地方を中心とする三十三所には「西国」が冠せられた。

西国三十三所巡礼の巡礼道は、「歴史の道調査報告書第一集『西国三十三所巡礼道』において、足利健亮氏が寛政3年（1791）版『西國順禮細見記』をもとに、右図のとおり整理している。当町域には、第二十七番札所書写山圓教寺（姫路市）から、粟賀、追上を経て矢名瀬（朝来市）へと至り、第二十八番札所世野山（現成相山）成相寺（京都府宮津市）へとつながる道筋が通り、道端にはかつての往来を伝える道標も残る。



【参考・引用文献】「聖岡の里 おおかわち」(平成8年10月、大河内町教育委員会)

「歴史の道調査報告書第一集 西国三十三所巡礼道」(平成3年3月、兵庫県教育委員会)

但馬街道と生野鉱山寮馬車道に係るものがたり

【基本ストーリー】

かつての但馬街道(生野街道)の沿道には街道村や宿場町が形成されて人や物資が行き来し、近代には生野鉱山寮馬車道(銀の馬車道)として引き継がれ、中村・粟賀町は町場としてより一層の発展をみせ、播磨と但馬を結ぶ重要な役割を果たしてきた。播但鉄道が通って物資輸送の中心が鉄道へと移行すると、かつての但馬街道や馬車道は国道・県道・村道として受け継がれるとともに、播但連絡道路が開通するなど、現在も播磨と但馬を結ぶ主要な南北軸として、地域間の交通・交流を支え続けている。



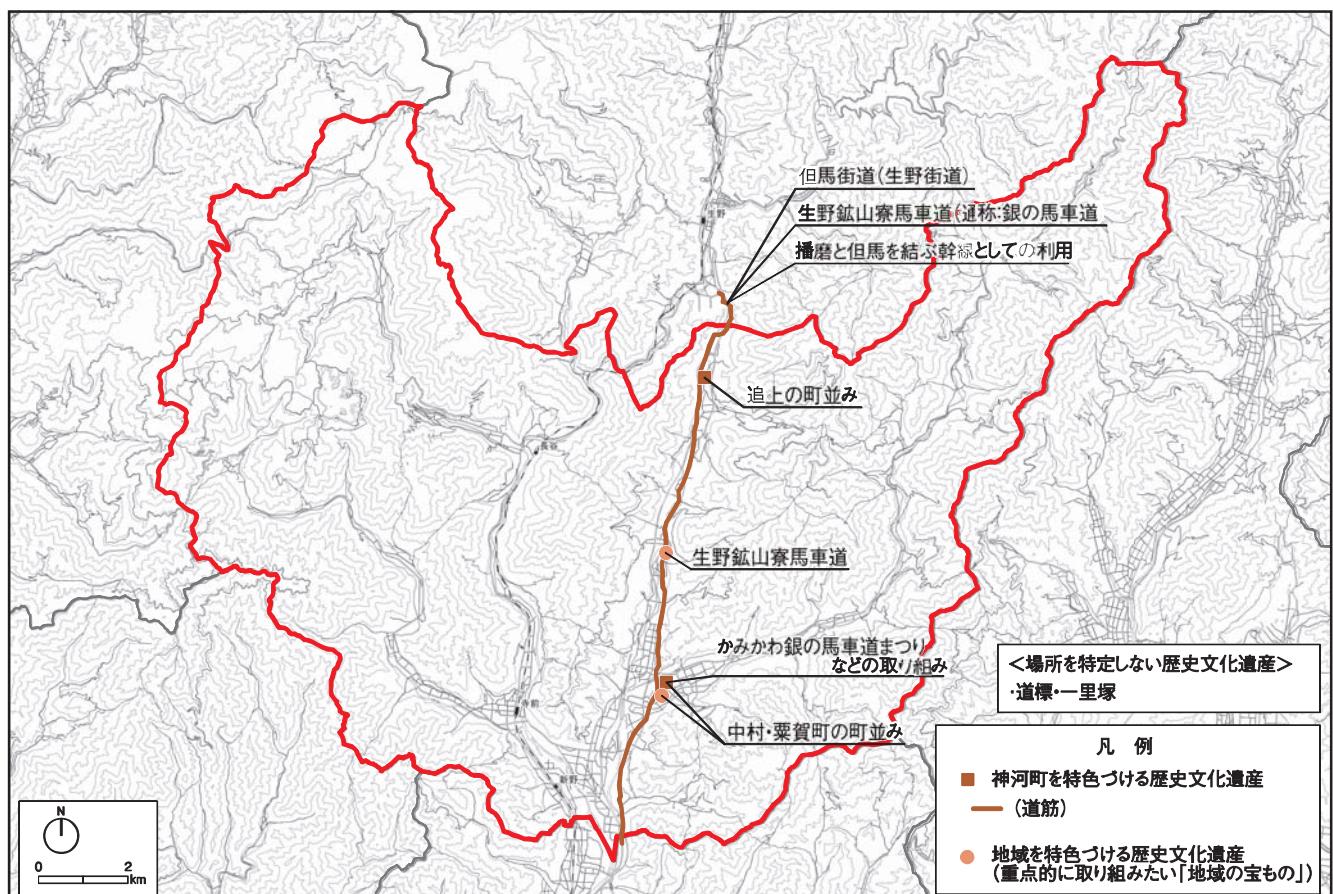
現存する馬車道



銀の馬車道交流館と旧難波酒造

【構成する歴史文化遺産】

神河町を特色づける歴史文化遺産	地域を特色づける歴史文化遺産
<ul style="list-style-type: none"> ・但馬街道（生野街道） ・生野鉱山寮馬車道（通称：銀の馬車道） ・中村・粟賀町の町並み ・追上の町並み ・道標・一里塚 	<p>※ 区長アンケート調査において、重点的に取り組みたいと回答された「地域の宝もの」のみを掲載する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・かみかわ銀の馬車道まつりなどの取り組み ・播磨と但馬を結ぶ幹線としての利用 ・町並み（粟賀町区） ・生野鉱山寮馬車道（杉区）



但馬街道と沿道に営まれた集落

■ 但馬街道の成り立ちと沿道の集落

市川流域の道筋では、瀬戸内の塩が「南塩」と呼ばれ、仁豊野から屋形、粟賀、追上（猪篠）、生野、新井、竹田と但馬国に運ばれていた。この道筋は、山名・赤松の合戦などの戦の道や西国三十三所巡礼などの信仰の道にも使われ、古くから当地域の幹線としての役割を担ってきた。戦国時代に織田・羽柴軍が但馬を制圧すると、竹田城から粟賀の道筋は、人馬や物資が往来する街道として賑わいをみせる。



杉の町並み

この但馬街道が通る村々では、街道に沿って建物が建ち並び、歴史的な様式や趣を残す民家や道端の道標などが、かつての街道集落としての歴史を伝える。なかでも、粟賀町と追上（猪篠）は人馬繼立ての宿場として賑わいを見せた地であり、古くからの民家が数多く残り歴史的な町並みを現在に受け継いでいる。

中村・粟賀町 江戸時代の寛文 3 年（1663）に福本藩が置かれると、陣屋北部の街道筋の両側に商工業者を定着させて、人馬の乗継をする宿場町が整備された。この中村・粟賀町では、流通の問屋や商家、旅宿も屋号を掲げて商いを競い、旅人の往来や商品流通が増加するなかで地域経済の中心地として発展し、年に数度、生野銀山から大坂城への産出銀納入の道中行列（御銀登道中）^{おきののちゆう}にも中継ぎの人馬を供給したという。現在も、牛や馬の蹄の手入れのために、底に石畳を敷いた水路を歩かせた跡（牛馬の流し場）が残されている。また、中村・粟賀町の町並みには、昔ながらの白漆喰で仕上げられた蔵や、木製格子窓や虫籠窓、竹矢来などの伝統意匠を配した建物も残り、歴史的な風情を感じさせる。また、町並みの中心には、江戸時代に初代が大坂からこの地に移り住んで養蚕業や染色業を営み、江戸時代末期から昭和 50 年代頃まで酒造業を営んできた旧難波酒造や、江戸時代には中村屋という屋号で醤油や酒などの醸造業や茶問屋を営み、天保 12 年（1841）の粟賀町村の火災後に、生野鉱山の山師住宅を移築したものと伝わる竹内家住宅などが街道に沿って建ち、その規模の大きさなどからは、往時の町場の繁栄を感じとることができる。

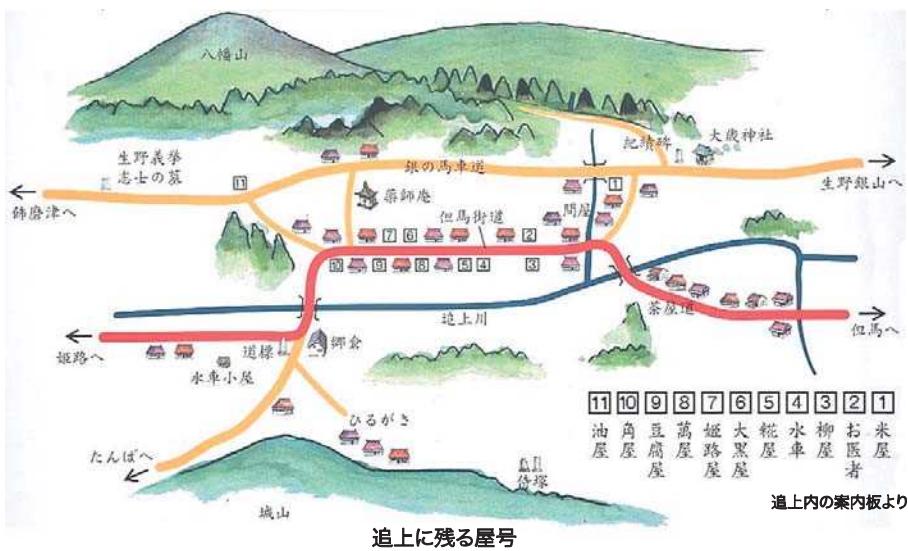


中村・粟賀町の町並み

追上（猪篠） 猪篠区追上の郷倉（代官所に納める年貢米の収納を目的として立てられた倉）の前には、「右 ひめじ、左 たんば」の道標がみられるように、追上は但馬街道と丹波街道の分岐点にあたり、人馬繼立ての問屋が置かれ、茶屋等も増えて宿場として賑わいを見せた。明治期に整備された生野鉱山寮馬車道は、追上付近では但馬街道と別のルートで整備されたことから、現在も古くからの細く緩やかに曲がる道が残り、伝統的な様式を踏襲した民家とともに歴史的な佇まいを残す。また、「大黒屋」「角屋」「姫路屋」などの屋号をもつ家々も残り、街道集落としての繁栄の歴史を感じることができる。



追上の町並み



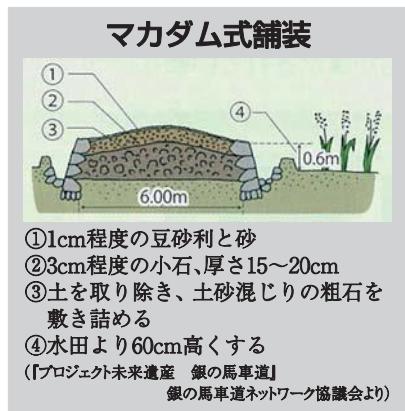
【参考・引用文献】「せんれい」(かみかわ銀の馬車道まちづくり協議会)

『ふるさと猪篠』(昭和58年3月、猪篠地区新しいむらづくり推進協議会記念誌編集委員会編)

生野鉱山寮馬車道（通称：銀の馬車道）

■ 生野鉱山寮馬車道

明治元年（1868）、貿易による国づくりを目指した明治新政府は、対象の銀を必要とし、フランス式鉱山技術により生野銀山の再開発を行う。生野鉱山寮馬車道（通称「銀の馬車道」）は、明治9年（1876）に、生野銀山と飾磨津（現姫路港）の間の約49kmを南北に結ぶ馬車専用道路としてつくられた「日本初の高速産業道路」ともいえる道であった。当初、生野鉱山と飾磨津をつなぐ新しい輸送手段として、市川の船運や鉄道施設も検討されたが、多額の工事費用がかかるため見送られ、古くから使われてきた但馬街道をもとにして馬車が通れる最新式の道路に改修することとなった。フランス人のレオン・シスレーを技師長とし、当時のヨーロッパの舗装技術「マカダム式」を取り入れ、3年の工事を経て完成した。未曾有の事業であったことが、同年に建てられた記念碑「馬車道修築」の碑（姫路市砥堀）



に記されている。なお、当時の馬車は、長さ3m、幅1m程の檻の木製の車台から出る2本の梶棒を馬に取り付け、車台の下には直径約1mの2つの車輪が付き、地面に接する部分は鉄板で補強されていたと伝わる。

馬車道は、生野鉱山の採掘・精錬に必要な機械や日常用品などの物資、产出された銀等の鉱物の輸送ルートとして大きな役割を果たしてきたが、明治27年（1894）、飾磨寺前間の播但鉄道が開通すると、徐々にその役割を終え、大正9年（1920）には廃止された。その後、改修や路線変更を経ながら、現在も大部分が国道や県道、町道として利用されている。

神河町域は、かつての馬車道を残す区間（畑川原池沿い）もみられる馬車道のなかでも特に残りが良い区間であり、かつての馬車道に関連する「観音橋」「馬橋」などの歴史文化遺産も残る。

観音橋 法楽寺の参道にあったことから「観音橋」と呼ばれるようになったこの橋は、かつて大橋として20mほど上流にあった。明治初期の馬車道はこの大橋が補強されて開通した。その後、明治36年（1903）に現在のルートに変更して木橋がかけられ、昭和4年（1929）にコンクリート橋として整備された。現在の観音橋の南側たもとには、大橋石碑と道標がある。これは、20m上流からの観音橋の付け替えの時にあわせて移設されたものであり、道標をよく見ると示す地名の方向が違っていることが分かる。

馬橋 粟賀町は古くは町の防衛構造として、横町筋（現在の公民館）で直角に東へ屈曲し、山の麓へと向かうルートになっていた。しかし、銀の馬車道の建設時に、当時の馬車は小回りができなかったため、この辻から城下町福本の北総門まで直進するルートに変更された。この時に東山谷川を渡るために橋が架けられ、馬車専用道路として建設されたことで「馬橋」と命名された。



生野鉱山寮馬車道



- ①車輪：直径約1m
 - ②車台：長さ3m、幅1m
 - ③木枠：長さ2.5m、幅0.9m
- （『プロジェクト未来遺産 銀の馬車道』銀の馬車道ネットワーク協議会より）



観音橋道標



馬橋

守り・育み・活かす

～生野鉱山寮馬車道（銀の馬車道）と街道筋の歴史的町並みを活かす～

中播磨地域全体での取り組み 中播磨地域の馬車道沿線では、生野鉱山寮馬車道の通称「銀の馬車道」をシンボルに掲げ、交流の輪を広げ、地域の元気とにぎわいづくりにつなげる「銀の馬車道プロジェクト」を展開しており、その推進母体として、商工会議所や商工会をはじめ青年会議所、旅行社、マスコミ、行政等を構成メンバーとした「銀の馬車道ネットワーク協議会」を組織している。同協議会では、銀の馬車道ラッピングバスの運行やマカダム式道路試掘調査・模型作成、観光ボランティアガイドの活動支援などの様々な取り組みを実施している。また、取り組みのひとつとして、沿線地域の魅力を発信するため、「銀の馬車道」を商標登録し、「銀の馬車道」のイメージを活用した商品の開発・販売を支援し、菓子類をはじめ、酒、弁当、定食、様々な食品・グッズなど、140を超える商品が誕生している。また、平成27年度からは、生野鉱山（朝来市）、神子畠鉱山（朝来市）、明延鉱山（養父市）を結ぶ「鉱石の道」と連携を図りながら、「日本遺産」の認定に向けた取り組みも推進している。



銀の馬車道交流館の整備・活用 神河町では、平成15年（2003）から中村・粟賀町地区を中心に「銀の馬車道」をキーワードとした取り組みを展開し、平成19年（2007）10月、地域の交流の場やまちづくりの拠点として「銀の馬車道交流館」を開館させた。館内では銀の馬車道に関する資料展示、地域の自然や歴史、文化などに関する展示などがあり、銀の馬車道関連商品や地域の特産品なども販売している。また、平成26年（2014）9月には、木造インターナンシップの取り

組みと連携し、日本工科大学校（姫路市）、龍野北高校（たつの市）、東播工業高校（加古川市）等の学生が、地元の兵庫土建組合神崎分会・西播瓦事業協同組合の職人の指導のもと、同館の玄関の改修等（その他街道沿いに飾るプランターブリキや古民家の改修）を行い、馬車道を活かしたまちづくりの拠点の整備とともに、伝統の木造建築の技術の学習・継承にもつながっている。

かみかわ銀の馬車道まちづくり協議会の取り組み 平成25年度には、中村・粟賀町の各区の区長や役員、かみかわ銀の馬車道商店会、銀の馬車道交流館運営協議会の傘下のもとに、中村・粟賀町の賑わいを復活させようと、6回のワークショップを行い、意見を出し合って「中村・粟賀町ふるさと自立計画」を作成した。同時に「かみかわ銀の馬車道まちづくり協議会」を設立し、協議会内に次の4つのチームを構成し、計画の実践に向けた様々な取り組みを展開している。

- ①古民ナリエチーム：古民家、空き家、空き地の活用
- ②馬やどりチーム：歴史的、文化的な街道が誇る資源、名所旧跡のPRパンフレットの作成
- ③もりあげたいANチーム：かみかわ銀の馬車道七夕まつり、かみかわ銀の馬車道まつり等のイベント企画、特産品開発
- ④広報チーム：各チームの選抜メンバーにより地域向けニュース、情報の発信等

歴史的町並みの保全・活用 これらの取り組みと併行して、平成21年度には兵庫県により景観形成地区指定のための調査が実施された。この調査成果を受けて、平成26年（2014）に、「景観の形成等に関する条例」（兵庫県）に基づく歴史的景観形成地区に指定され、歴史的な町並みの保全・形成と活用に向けた取り組みが展開している。

なお、歴史的景観形成地区では、地区内の建築物又は工作物の新築・改築・増築・移転・大規模な修繕・大規模な模様替え、外観の過半にわたる色彩又は意匠の変更、屋外における自動販売機の設置にあたって、事前に届出を行うこと、また景観形成基準に適合したものとすることが義務付けられる一方で、歴史的景観形成建築物等修景助成（修景助成事業）として、工事費の一部助成を受けることができるようになっている。



中村・粟賀町
ふるさとまちづくりだより



門扉を設けるときは、町並みとの調和と連続性に配慮した、和風意匠となるように努める。

『あすの景観をつくる 神河町中村・粟賀町地区歴史的景観形成地区 景観ガイドライン』（兵庫県土整備部まちづくり局都市政策課景観形成室）より

中村・粟賀町地区歴史的景観形成地区における景観形成基準の例

【参考・引用文献】「プロジェクト未来遺産 銀の馬車道商品ガイド」（銀の馬車道ネットワーク協議会）

『中村・粟賀町ふるさとまちづくりだより』（かみかわ銀の馬車道まちづくり協議会）

『あすの景観をつくる 神河町中村・粟賀町地区歴史的景観形成地区 景観ガイドライン』

（兵庫県土整備部まちづくり局都市政策課景観形成室）

播磨国風土記と福本遺跡に係るものがたり

【基本ストーリー】

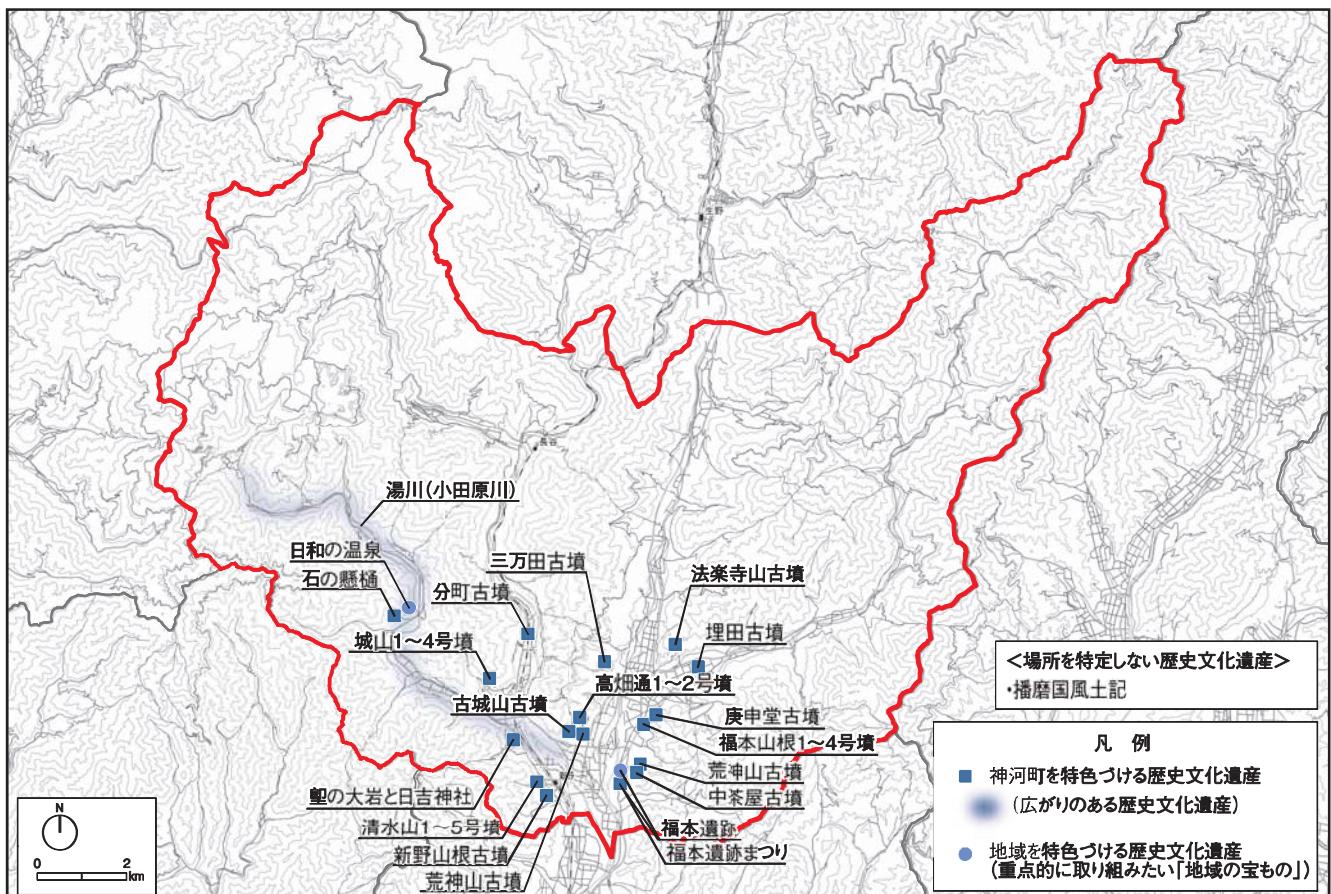
神河町のほとんどの地域は『播磨国風土記』の「神前郡 聖岡里」に含まれ、里の由来に関わる逸話が今日に伝わる。また、福本遺跡では、縄文時代、弥生時代、奈良時代の遺構や遺物が発見されており、聖岡の里での人々の暮らしの起点が明らかになりつつある。風土記の検証により物語が浸透するにつれ、聖岡里の伝承に関連づけられた歴史文化遺産も多く存在するようになり、さらに周辺の古墳群等と一緒にとなって悠久の歴史ロマンを感じることができる。



『播磨国風土記』編纂1300年記念事業で作成した絵本

【構成する歴史文化遺産】

神河町を特色づける歴史文化遺産	地域を特色づける歴史文化遺産
<ul style="list-style-type: none"> ・福本遺跡 ・高畠通古墳群・城山古墳群等 ・石の懸樋と湯川（小田原川） ・聖の大岩と日吉神社 ・福本遺跡まつり ・播磨国風土記 	<ul style="list-style-type: none"> ・福本遺跡（福本区） ・日和の温泉（南小田区）



■『播磨国風土記』

『続日本紀』の和銅6年（713）5月2日条に、地名にふさわしい文字をあて、国内の特産物や地名の由来・地味また古老たちの伝える言い伝えなどを記録して上申するよう官命が出されたことが記されている。この官命を受けて、当時の全国60余の国において、後に「風土記」と呼ばれる報告書づくりが進められた。このうち「常陸国（茨城県）」、「出雲国（島根県）」、「肥前国（佐賀県）」、「豊後国（大分県）」、そして「播磨国（兵庫県）」の5ヶ国の「風土記」のみが写本を伝えている。『播磨国風土記』は、当時の播磨国にあった郡ごとに書かれ、一部失われているものの、その重要性から国宝に指定されて、天理大学付属天理図書館において保管されている。

神河町を含む神前郡に係る項は現存し、そこには、「聖岡里」の地名の由来としての大汝命と少比古尼命の我慢比べの伝承や品太天皇（応神天皇）の巡行、また、湯川や大川内の地名の伝承などが記されている。また、聖岡里の地味は、最も低い「下下」とされ、痩せた土地であったこと、一方で「檜・杉」が自生していたことも記されている。さらに、大川内と湯川には「異俗人」が住んでいたことも記されており、この異俗人を蝦夷であるとする説もある。

■ 日吉神社と聖の大岩

大汝命と少比古尼命の我慢比べの伝承のなかで、重い聖が投げ捨てられたところを聖岡と呼ぶようになったとしている。その投げ捨てた聖の一部が日吉神社の裏山にある大岩と比定されている。



日吉神社



聖の大岩

■ 湯川（小田原川）と石の懸樋

『播磨国風土記』によると、小田原川はかつて湯川と呼ばれ、日和あたりにはお湯が湧いていたといわれる。また、近くにはお湯をひいていたといわれる石の懸樋がある。



湯川(小田原川)



石の懸樋

『播磨国風土記』 読み下し文（一部抜粋）

かむさきのこり みぎ かむさき なづ ゆゑ いわのおほかみ みこたけいはしきのみこと やまつかひのむら かむ
神前郡。右、神前と号くる所以は、伊和大神の子建石敷命、山使村の神
さき やまと いさ すなは かみいさま より なづ かれ かむさきのこほり い はにおかのさと
前山に在しき。乃ち、神在せるに因りて名とす。故、神前郡と曰ふ。聖岡里。
いくの おぼうちかわ ゆかわ あはか はじかのむら つち しも はにをか なづ
〔生野。大内川。湯川。粟鹿。波自加寸。〕土は下の日なり。聖岡と号く
ゆゑ むかし おほなむらのみこと すくなひこねのみこと あひあらそ い はに に
所は、昔、大汝命と少比古尼命と相争ひて云ひたまひしく、「聖の荷
にな とほ ゆゑ くそま とほ ゆゑ こ あつ こといづ
を担ひて遠く行くことと、下屎らずして遠く行くことと、此の二の事何
れか能くせむ」といひたまひき。大汝命曰ひたまはく、「我は下屎らずし
ゅ おも すくなひこねのみこと い あ くそま
て行かむと欲ふ」といひたまふ。少比古尼命曰ひたまはく、「我は聖を持
ちて前に行かむと欲ふ」といひたまふ。如是く相争ひて行きたまふ。數
か へ おほなむらのみことい あ いの あた
日を遅て、大汝命云ひたまはく、「我は忍びて行くこと能はず」といひた
まひて、即ち坐て下屎りたまふ。爾時に、少比古尼命、咲ひて曰ひたまはく、
しか 「然るに苦し」といひたまひて、亦其の聖を此の岡に擲ちたまひき。故、
はにをか なづ またそま とき さ さ そ くそ はじ あ みそ つ
聖岡と号く。又下屎りたまひし時に、小竹其の屎を弾き上げて衣に行きき。
かれ は じかのむら なづ そ はに くそ いは な いま う あるひとい
故、波自賀村と号く。其の聖と屎と、石に成りて今に亡せず。一家云はく、
ほむだのすめらみこと めぐりい とき みや こ か づく みことのり い
「品太天皇、巡行でましし時に、宮を此の岡に造りたまひて、勅して云ひ
こ つち はに かれ はにをか い
たまひしく、「此の土は聖とあり」といひたまひき」といふ。故、聖岡と曰ふ。
いくの なづ ゆゑ むかし こ あら かみいさま ゆき ひと ながれごろ
生野と号くる所以は、昔、此處に荒ぶる神在して、往来する人を半殺しき。
これ よ しにの なづ の ち ほむだのすめらみこと みことのり い
此に由りて、死野と号く。以後に、品太天皇、勅して云ひたまひしく、「此
あ な あらた いの あはかのかよち
は悪しき名なり」といひたまひて、改めて生野としたまひき。粟賀川内
い にれお おほかあち よ な ひのき にれお また
と曰ふ。〔櫻生ふ。〕大川内。大きなるに因りて名とす。〔檜・粉生ふ。又、
あだひどみそたりばかりあ ゆかは むかし ゆ こ かは い かれ ゆかは ひのき にれ
異俗人糸許口有り。〕湯川。昔、湯此の川に出でき。故、湯川といふ。〔檜・粉・
あだひひとどみそたりばかりあ
黒葛生ふ。又、異俗人糸許口有り。〕（…後略）

（『播磨国風土記』〔沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉編著〕）

福本遺跡

■ 福本遺跡の発見と発掘調査

市川流域の弥生時代遺跡の分布調査を行っていた増田重信が、福本地区南部で昭和 27 年（1952）に採取した一片の押型文土器（福本式土器）によって、はじめて播磨地方の縄文時代早期の遺跡が明らかになった。その後、昭和 44 年（1969）の試掘調査、昭和 51 年（1976）の分布調査を経て、昭和 52~60 年（1977~1985）にかけて 5 次にわたる発掘調査が実施され、旧石器時代の石器群や縄文時代早期の土坑内から押型文土器、弥生時代中期の集落跡（竪穴住居 11 棟・土器棺 3 基等）、古墳時代後期の集落跡（竪穴住居 6 棟）、飛鳥・奈良時代の瓦窯跡（5 基）や掘立柱建物（7 棟）などが検出された。これらより、福本遺跡は東西 150m、南北 800m に広がり、約 13,000 年以前の旧石器時代から奈良時代へと続く複合遺跡であることが明らかとなった。文献資料である『播磨国風土記』の「聖岡」に関係する考古資料としても貴重な遺跡とされている。



福本遺跡出土遺物の整理作業風景

■ 各時代の福本遺跡のくらし



縄文時代 福本遺跡の位置する台地は、小さな谷で3つの地区に分けられる。南から北へA地区、B地区、C地区と名付けられている。各地区から押型文土器をはじめ縄文時代早期から晩期の土器・石器が採集されている。この押型文土器は、近畿地方縄文文化早期に位置する型式として、福本遺跡を標式遺跡とする「福本式土器」と名付けられた。福本式土器は、押型文の尖底深鉢を基本とし、口縁部がやや外反するものや内傾するものがある。類似する黄島式土器（標式遺跡：岡山県黄色島貝塚）に比べそりが弱い点に特徴がある。山形文・楕円文の水平施文を特徴とし、口唇・口縁端をキザミで飾るものもある。



弥生時代 弥生時代のくらしを代表するものに米づくりがある。
現在のところ木製農具等は出土していないが、福本遺跡付近の谷間や平地には水田がつくられていたと考えられている。福本遺跡では弥生時代中期の円形竪穴住居が多数発見されており、建物の中央には煮炊きや暖炉などに使用された炉跡や、食物を蓄えたり盛ったりした土器、「台石」と呼ばれるまな板や作業台のような平らな石器が発見されている。また、土を盛った大きな墓は発見されていないが、土器の中に骨を入れた土器棺墓が発掘されている。



飛鳥・奈良時代 B 地区の丸山丘陵の斜面に 3 基、その北側の平坦地に 2 基の瓦窯が検出されている。出土瓦は斜面と平坦地とで異なり、斜面の窯の方が先に作られたことが分かっている。軒先に用いられた軒丸瓦には蓮華紋の文様が入れられ、軒平瓦には重弧紋と唐草紋のものが出土している。これらの瓦が生産された年代は 8 世紀初め頃と考えられている。これらの瓦がどこに運ばれたかは、未だ不明である。しかし、古代の瓦葺きの建物は、都を除くと寺院にはほぼ限られていたため、この福本遺跡の近くに古代寺院が眠っている可能性も高いと考えられている。



福本遺跡出土遺物

守り・育み・活かす

～福本遺跡の保存・整備と活用～

昭和 55 年（1980）の夏、住民と行政が協力し福本遺跡の保存に向け「福本遺跡を考える会」を発足した後、あまり開発がされていなかった B 地区約 33,000m² を買上げ、平成 10 年（1998）に同地区を旧神崎町の史跡に指定した。その後、平成 17 年度から平成 19 年度の 3ヶ年において、国、県の補助金を受け、福本遺跡における 5 次の調査の成果報告を『福本遺跡調査報告書Ⅱ』にまとめた。そして、平成 21 年（2009）に町の史跡に指定されていた B 地区を県の史跡に指定し、保護・保存を図っている。

このような保護・保存のための取り組みと併行して、福本遺跡では、高校生による竪穴住居の復元や現地案内板、出土遺物の展示や学習ツールとなるパンフレットの発刊など様々な整備や取り組みを展開してきた。また、平成 20 年（2008）には、『福本遺跡調査報告書Ⅱ』の刊行を記念して、第 1 回福本遺跡まつりが開催された後、毎年 10 月又は 11 月に福本遺跡まつりを継続開催してきた。この福本遺跡まつりでは、福本遺跡を舞台に、勾玉づくりや縄文クッキーの試食、竪穴式住居の屋根葺き、縄文・古代・現代のおにぎりの販売、歴史ウォークなどの様々なイベント（年によって内容は異なる）が催され、太古の先人の暮らしを感じるとともに、地域住民の憩いと交流の場となっている。

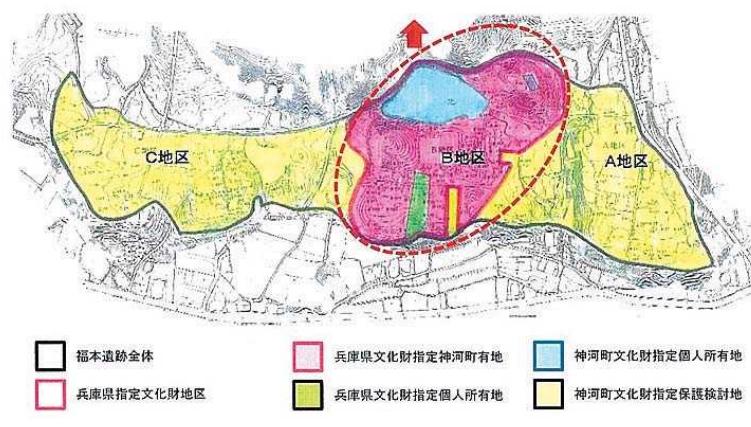
平成 26 年度には、福本遺跡を学びと交流のフィールドミュージアムとして、整備を進めるべく、住民と行政が協力して「神河町歴史文化基本構想の策定に伴う福本遺跡活用整備に向けた検討素案」を作成してきた。また、福本遺跡の調査が進むなかで、『播磨国風土記』の「聖岡」に関係する考古資料としての価値づけがされるなかで、平成 27 年（2015）2 月には、『播磨国風土記』編纂 1300 年記念事業の一環として、リーフレット（絵本）『播磨国風土記ものがたり 聖岡の里 神河』を作成しており、今後、『播磨国風土記』に関連する歴史文化遺産との連携、また、城山古墳群などの調査が進むなかで近隣の古墳などとの連携を図りながら、より一層魅力的な史跡の保存・活用に向けた検討を進めていくことが予定されている。



福本遺跡から見た神河町風景

瓦葺跡の保存:周辺の樹木を伐採。

復元竪穴住居



福本遺跡の史跡指定と土地所有の状況



福本遺跡まつり



高校生による竪穴住居の葺き替え作業



小学生の遺跡見学

福本藩と近世村落に係るものがたり

【基本ストーリー】

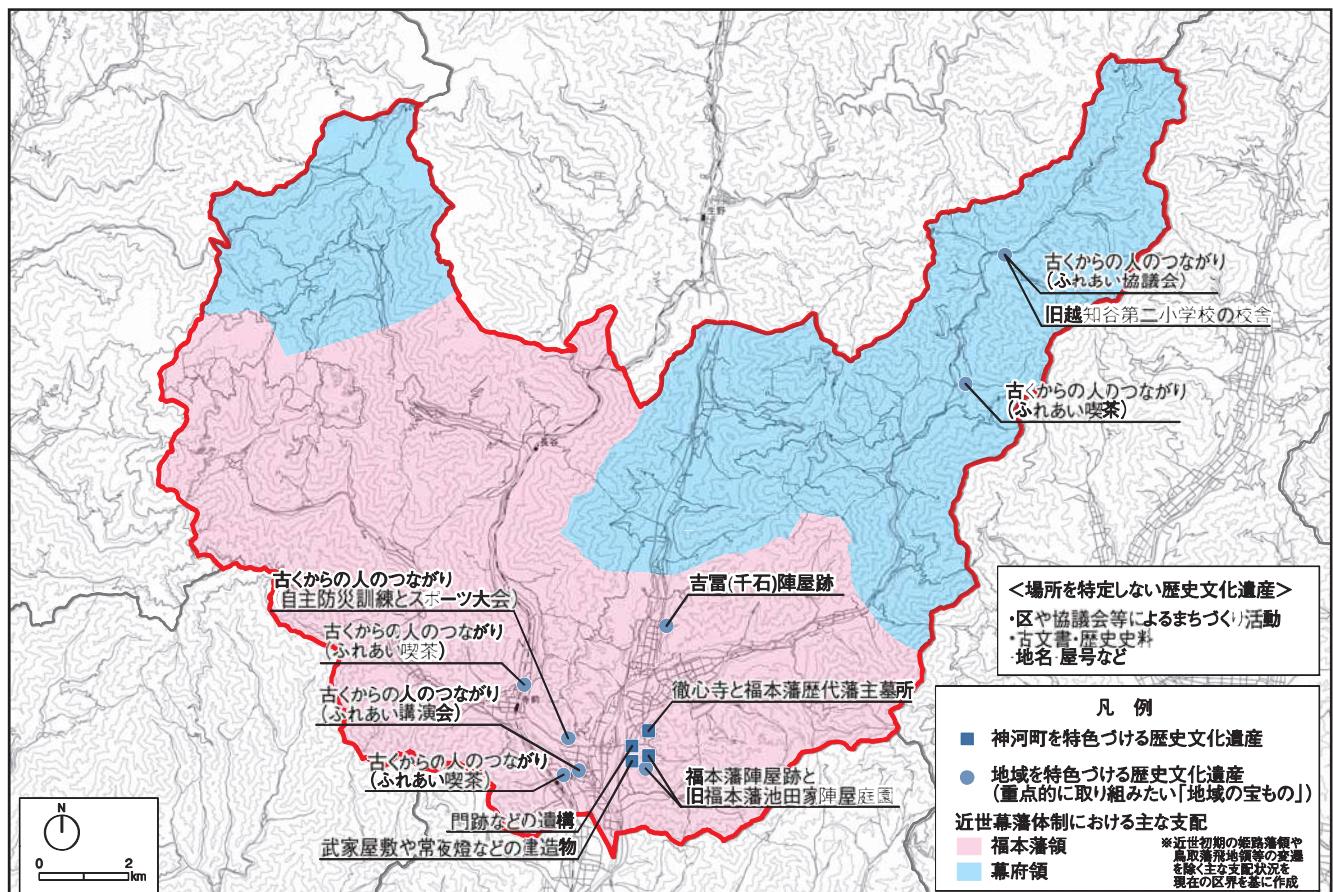
近世、神河町の村々は、姫路藩領や鳥取藩飛地領などの領主変遷を経て、幕府領と福本藩領に大きく分かれる。うち、福本藩領の中心となったのが福本藩陣屋であり、その周辺には福本藩池田家の支配に関連する歴史文化遺産が数多く集積し、かつての当地域の政治・文化の中心性を物語る。

また、近世村落は、人々の共同体意識を高めるとともに、古くからの民家や家並み、屋号など地域色豊かな歴史や文化を育んできた。この近世村落から続く区民の強い絆は、現在も区の共同作業や協議会活動などとして、形を変えながら受け継がれている。



【構成する歴史文化遺産】

神河町を特色づける歴史文化遺産	地域を特色づける歴史文化遺産
<ul style="list-style-type: none"> ・福本藩陣屋跡と旧福本藩池田家陣屋庭園 ・徹心寺と福本藩歴代藩主墓所 ・門跡などの遺構 ・武家屋敷や常夜燈などの建造物 <ul style="list-style-type: none"> ・区や協議会等によるまちづくり活動 ・福本藩領と幕府領の村々 ・古文書・歴史史料 ・地名・屋号など 	<p>※ 区長アンケート調査において、重点的に取り組みたいと回答された「地域の宝もの」のみを掲載する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・旧福本藩池田家陣屋庭園（福本区） ・吉富（千石）陣屋跡（吉富区） ・地域コミュニティ関連 <ul style="list-style-type: none"> ▶ふれあい協議会（作畠区） ▶旧越知谷第二小学校の校舎（作畠区） ▶ふれあい喫茶（大畠区、野村区、鍛治区） ▶ふれあい講演会（寺野区） ▶自主防災訓練とスポーツ大会（柏尾区）



福本藩池田家陣屋

■ 近世の村々の支配と福本藩

神河町の村々は、慶長 5 年（1600）関ヶ原の軍功により、池田輝政の姫路入部以来、姫路藩領となり、寛永 16 年（1639）には幕府領となった。そのうち旧多可郡に属す村々と川上村は幕末まで幕府領であった。ほかの村々は翌 17 年に鳥取藩の飛地領となり、寛文 3 年（1663）に福本藩領となり多少の変遷はあるが幕末に至る（前ページの図参照）。

福本藩は池田輝政（初代姫路藩主）の四男輝澄の系譜をひく池田氏で、初代政直は神東郡・神西郡・印南郡の 1 万石の外様大名であったが、2 代政武以降は交代寄合（参勤交代をする旗本）となった。福本には陣屋が置かれ、幕末までの約 200 年間、地域の政治の中心地としての役割を担った。

■ 福本藩陣屋の名残

かつての福本陣屋は、現在の大歳神社（福本区）の境内にあたり、陣屋敷や庭園、馬場などが位置していた。また、但馬街道に構えた南惣門から北惣門まで約 600m の間は両側に商家などの町屋が軒を並べ、街道筋から東側に家中屋敷が広がっていた。大歳神社（福本区）の周辺には、かつての陣屋に関連した歴史文化遺産も残されており、往時を想い起こすことができる。

旧大歳神社参道

大歳神社は大正 2 年（1913）頃まで字山根の山上に鎮座しており、街道の北惣門前から参道があり、元禄 15 年（1702）奉獻の石造鳥居があった。この鳥居は大正 2 年に藩邸跡に移設された。

北惣門跡

但馬街道に南北惣門を構えて陣屋に取り込み、門前に下馬所を設けた。門外には十間余を拡張した溜りを設け、柵と竹矢来で防御を固めた。

裏御門跡

表御門とほぼ同じ構造の御門で、通りの勾配が急なため数段の階段を設け、街道から御門に至る間は両側に竹矢来を組んで防御を固めた。

防壘跡

傾斜地に構えた陣屋の外郭防壘として、段差盛土の土星上に竹矢来と竹藪を連ねていた。

常夜燈

建立時には高札場の辻に置かれていたが、神社参道が開かれた際に現在地に移された。

高札場跡

表御門通りと但馬街道が交差し、大川西岸への道路に繋がる交通の要所であるため、高札が立てられていた。

表御門跡

表御門通りの中程で、門の内側に間口三間半、奥行二間半の番所があり、門番が常駐し、夜間は門扉を閉めていた。

南惣門跡

南正面に高さ 4m 余の土壘を築き、周囲を竹藪で覆い街道を鉤型に曲折させて防御を固めた。

武家屋敷

幕末期の勘定奉行職の邸宅で、外観はほぼ当時のまま継承されている。

徹心寺

茅葺屋根の山門と本堂がある福本池田家の菩提寺で、陣屋造営時に創建され、御屋敷の乾方角防衛の要衝として、裏御門を見下ろす山上に位置する。寺院境内には福本藩の歴代藩主の墓所がある。

藩邸屋敷跡

大歳神社の境内地は、現在神河町の史跡に指定され、寛保年間（1740 頃）に描かれた絵図を付した案内板が設置されている。これによると、現在の社殿前の広場中央付近に御屋敷があり、南側には御作山の麓を借景として東畔に築山を備えた池泉回遊式庭園（旧福本藩池田家陣屋庭園）が主庭園として造られ、御能舞台が中庭に備けられていた。



旧福本藩池田家陣屋庭園

保秀稻荷社

初代藩主・松平正直がこの地に陣屋を造営した時、藩邸御屋敷の丑寅方角に、鬼門の抑えと家門領知の鎮護として勧請建立させたと伝えられ、歴代藩主と家臣たちの厚い信仰と庇護を請けてきた。



大手広場跡

御屋敷の正面で大手前とも呼ばれ、参勤交代や軍役出兵の際にはここで隊列を整えて出発した。防御上、正面御門は、大名丁通りから見えない位置にある。

四辻跡

元禄時代の絵図にある四辻で、東西方向が大名丁通り、南北方向が大黒丁通りと呼ばれ、家臣の邸が連なり、北西敷地に御米蔵とその西側に学習館、南東敷地に槍剣道場があった。

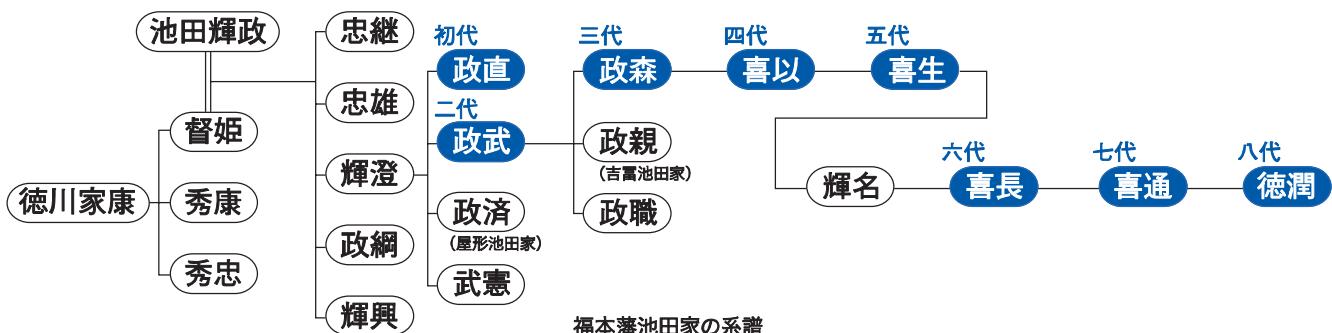
池田家と徹心寺

■福本池田家の系譜

福本藩池田家の初代藩主政直は、嗣子がなく寛文5年（1665）に没すると、政直の弟政武へ7千石、次々弟政済に3千石が分知された。そして、貞享4年（1687）には、政武領の7千石からさらに政武の次男政親に千石が分知された。その結果本流となる政武系の「福本藩主家」は神東郡福本に陣屋を構える6千石の交代寄合旗本となり、庶流にあたる政済に続く「屋形池田家」は神東郡屋形村（現市川町）を陣屋地とする3千石の寄合旗本に、政親に続く「吉富池田家」は下吉富（現吉富区）ほか4ヶ村を支配する千石の旗本になった。その後、福本藩主家の3代政森は家運隆盛に努め、8代徳潤に続く約200年間の藩政の基礎を固めた。元禄16年（1703）重陽の節供に政森が想いを託して大歳神社や法楽寺に奉納した絵馬が残る。なお、4代喜以も日吉神社と法楽寺の2ヶ所に絵馬を奉納している。



「神馬図絵馬」(法楽寺所蔵)
銘「国家長久 子孫繁栄 祈所也」
源政種(3代政森)元禄17年3月朔日



■徹心寺

徹心寺は、近世の福本藩陣屋御屋敷の乾方角防御の要衝として、裏御門を見下ろす場所に位置する。池田家の初代で時の藩主池田政直が、菩提寺として建立した寺院であり、境内には福本藩歴代藩主墓所がある。また、軒瓦などに池田家家紋の揚羽蝶がみられる。開基は積善院日林聖人である。



<input type="checkbox"/>				
政直	輝澄	政武	政森	喜以

<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
喜長	徳潤

福本藩歴代藩主墓所
(上図:配置図)

本堂 茅葺屋根の独特の趣をもつ建物で、保存されている棟札には宝暦12年に加東郡下番村（現在の小野市）大工棟梁好山善兵衛有吉の手で建てられたと書かれているが、後世の改築が多くみられる。向拝も入母屋造で茅葺という珍しい形式をもち、寺院数の少ない日蓮宗の本堂として注目されている。



徹心寺 本堂

山門 寺地の南に開く規模の大きな門で、せいの高い茅葺屋根の独特の趣をもつ薬医門である。随所に絵様・繩形を多く用い、部位に変化をつけるだけでなく、その一つ一つが極めて個性的である。町内での類例は寺野区の淨光寺山門があるのみである。建立時代を示す史料として、板扉の八双金具に「天保第九 夏 六月」の刻銘がある。



徹心寺 山門

受け継がれる近世村落の共同体意識

■ 各区に受け継がれる歴史史料

平成 21 年度から平成 25 年度にかけて実施した神河町歴史史料総合調査では、町内の各区に残る 3 万 5 千点余りの歴史史料を収集・整理した。そのなかには検地帳や名寄帳、五人組帳などに加えて、入会山や薪取場をめぐる争論に関する奉行所への訴状、村所有の入会山の運用に関する規定、溝普請や井堰普請に関する夫役帳・人足帳、村費に関する史料などもみられ、これらは地域の歴史を知る上で欠くことのできない重要な史料であると同時に、近世村落に育まれた共同体意識が近代、現代へと受け継がれていることを物語っている。



御仕置五人組帳
文政11年(1828)(新田区)

守り・育み・活かす

～区による地域誌づくり～

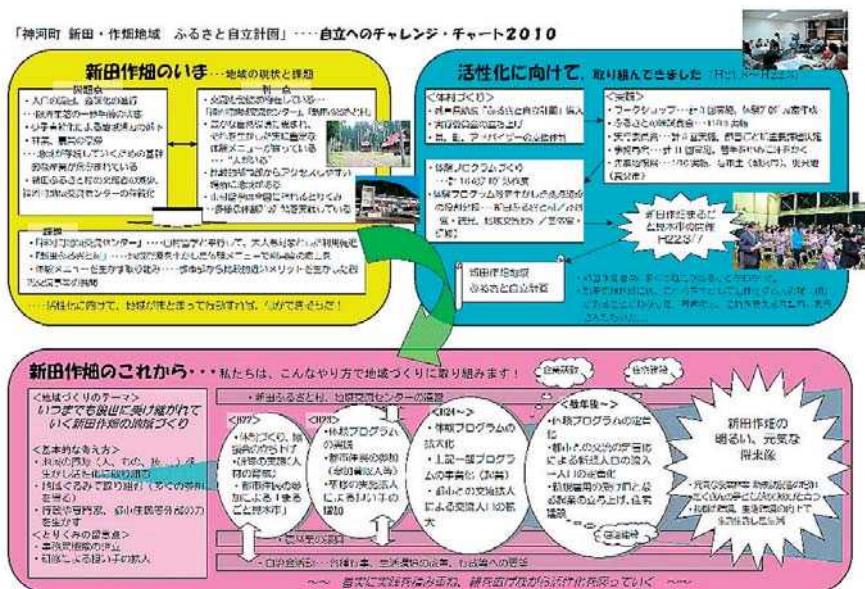
町内のいくつかの区では、区の概況や歴史に加え、歴史的な建造物や遺跡、祭り・行事、説話・伝承などを整理した「地域誌」の編纂の取り組みが実施されてきた。昭和58年(1983)には猪篠区、昭和60年(1985)には吉富区において、「地区再編農業構造改善事業」の実施記念としてまた昭和61年(1986)には寺前区の郷土史家により地域誌が編纂されている。また、平成18~20年(2006~2008)には、平成18年度に実施した「地域サロン事業」の成果をとりまとめる形で越知区、根宇野区、寺野区、柏尾区、大山区において地域誌が編纂されている。このほか、福本区では、区内の有志の取り組みとして『播磨・福本史誌』が編纂されている。

このような地域誌の編纂は、各区で受け継がれてきた歴史文化を見直す機会になるとともに、区民が区に受け継がれる歴史文化遺産の価値や魅力を再認識し、共有して地域づくりを進める道として役立っている。

～「地域サロン事業」をきっかけとした取り組みの展開～

平成18年度の「地域サロン事業」をきっかけに、地域の宝ものの案内看板の作成設置や虫送りなどの伝統行事の復活、地域誌の編纂、郷土料理の伝承や特産化などの様々な取り組みが展開している。「ふれあい喫茶」や「ふれあい講演会」などもそのひとつであり、また、新田区・作畠区では「千ヶ峰ふもとでふれあい協議会」、川上区・大川原区・本村区・赤田区・重行区・為信区・峠区・栗区・渕区の9区からなる「長谷地区の振興を考える会」の設立のように、区を越えた取り組みへの展開をみせてきている。

兵庫県では、平成21年度から平成25年度にかけて、多自然地域における地域資源の発掘・活用による地域の自立をめざす「ふるさと自立計画推進モデル事業」を実施しており、神河町では、平成21年度には「千ヶ峰ふもとでふれあい協議会」、平成23年度には「長谷地区の振興を考える会」、平成25年度には「銀の馬車道交流館運営協議会」により「ふるさと自立計画」が策定され、同計画に基づく様々な取り組みが展開されてきている。



吉富区の地域誌
『記念誌 よしとみ』

地域の伝承・信仰に係るものがたり

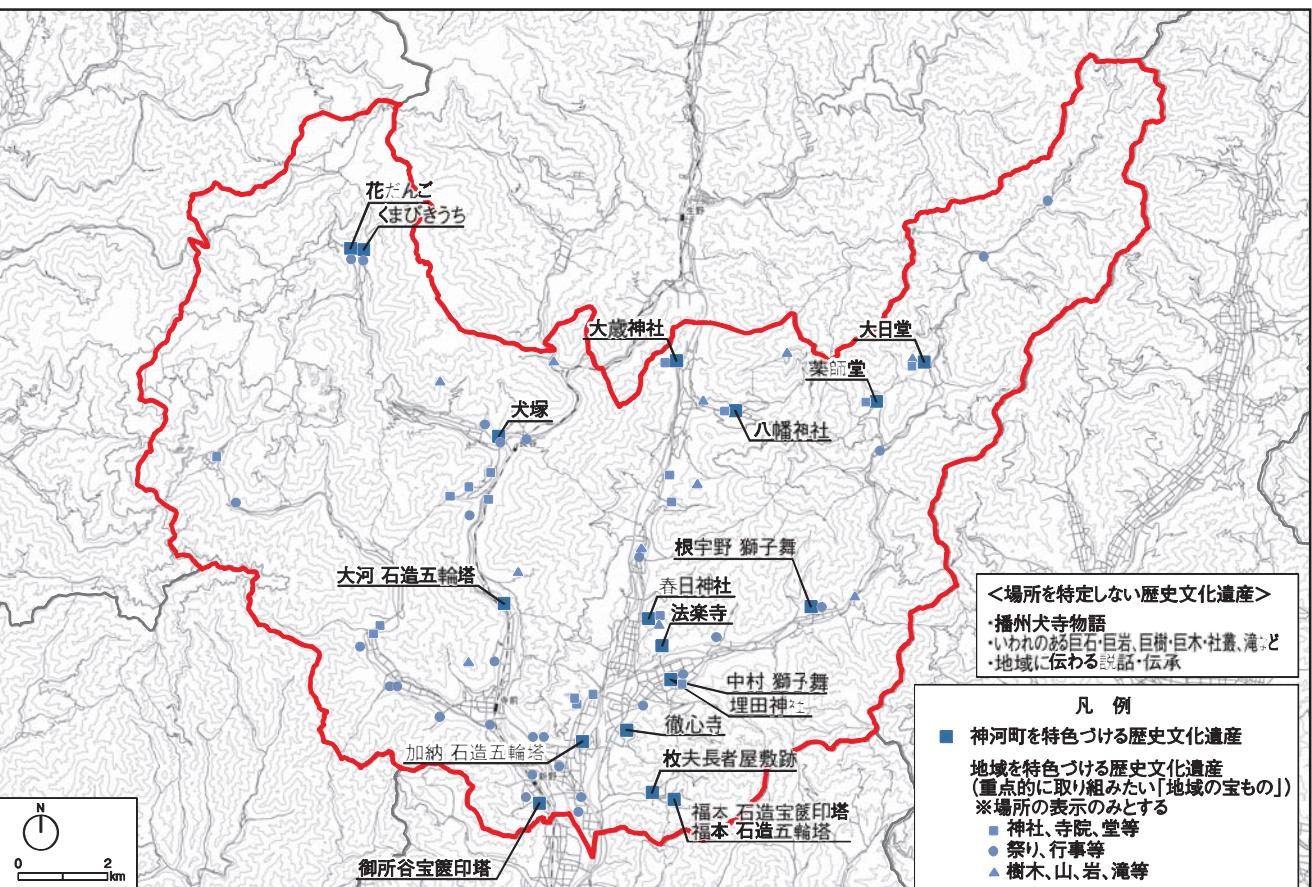
【基本ストーリー】

神河町には、法楽寺の犬寺物語や平家落人伝説とそれによつて花だんごなどにみられるように、各地域に様々な説話・伝承が受け継がれ、それらに彩られた祭りや行事、建造物や樹木などが各地域の歴史文化をより一層味わい深いものとし、町全域にわたる歴史文化豊かな居住環境をつくりだしている。



【構成する歴史文化遺産】

神河町を特色づける歴史文化遺産	地域を特色づける歴史文化遺産
<p>※ 区長アンケート調査において、重点的に取り組みたいと回答された「地域の宝もの」のみを掲載する</p>	



播州犬寺物語

■ 犬寺物語と法楽寺

犬寺物語は、鎌倉時代の学僧虎関師鍊が著した仏教史書『元亨釈書』や播磨地方の地誌『峯相記』、また、江戸時代の類書『和漢三才図絵』や播磨地方の地誌『播磨鑑』に紹介されている。時代を経るなかで、二匹の黒犬が白黒二匹となるなどの脚色はみられるが、その大筋は次のとおりである。

大化年間（640～650）、現在の福本区の地に枚夫長者という豪族がいた。彼には子どもがいなかったが、二匹の愛犬を我が子のように可愛がっていた。その頃、都で戦が起り、枚夫長者もその戦に従軍することになった。その留守中、枚夫長者の妻と家来が密かに通じ、やがて帰ってきた枚夫長者を狩りに誘い出し殺そうとした。その危ないところを助けたのが二匹の愛犬たちであった。感激した枚夫長者は、愛犬の死後、私財をなげうって伽藍を建立した。

このお寺が「栗賀犬寺」と呼ばれ、現在の金楽山法楽寺の前身にあたる。それ故、法楽寺は「播州犬寺」とも呼ばれている。

■ 犬寺物語にまつわる歴史文化遺産

法楽寺（中村区） 紀州高野山金剛峯寺を総本山とする真言宗の寺院で、本尊は十一面千手觀世音菩薩である。開山は大化年間（640～650）、開基は法道仙人といわれている。南禪寺の虎関師鍊国師が、元亨2年（1322）に著した仏教史書『元亨釈書』で紹介した当時の三十ヶ寺にも含まれるお寺であり、紅葉の名所としても知られる。境内には、県指定文化財の本堂や春日社、町指定文化財の梵鐘、山門、庫裡、鐘楼、開山堂、神馬図絵馬など多くの指定文化財がある。また、開山堂の堂内には、木造の開祖法道仙人像と枚夫長者と忠犬二匹の像が納められており、その他にも白・黒の犬像や長者の危機を白・黒二匹の犬がうかがう場面を描いた絵馬など、犬寺物語に関連する数々の歴史文化遺産がみられる。



法楽寺 本堂

石造五輪塔・石造宝篋印塔（福本区） 福本区の山林の中に安置されている石造五輪塔（総高 90cm）と石造宝篋印塔（総高 168cm）は、法楽寺の縁起に係わる忠犬伝説に登場する「白」と「黒」の二匹の犬の供養塔といわれている。どちらの石塔がどちらの犬の供養塔であるかは正確には分からぬ。しかし、石造五輪塔は「白五輪」、石造宝篋印塔は「黒五輪」と呼ばれている。どちらも花崗岩でつくられており、構造形式から南北朝時代に建立されたと推定されている。安永4年（1775）の山絵団面にも記載がみられる。



開山堂の枚夫長者と忠犬像



境内の白・黒の犬像



石造五輪塔



石造宝篋印塔

枚夫長者屋敷跡（福本区） 枚夫長者が住んでいたと伝えられる屋敷跡は「福山の里」と呼ばれ、「坪之内」と呼ばれる地神がある。

犬塚（本村区） 犬寺物語のなかで主人の命を助けた二匹の犬のうち、一匹がこの地で亡くなつたといわれており、その犬の死をあわれみ、塚を作つたとされる。毎年11月16日には、本村区・大川原区・赤田区・重行区・峠区によって、奉納相撲、祐泉寺住職による施餓鬼などの犬塚堂祭礼が執り行われる。



犬塚

池田家と徹心寺

■各地域に伝わる数多くの説話・伝承

町内の各地域には、地域の自然や歴史などを背景に、様々な説話・伝承が受け継がれている。その多くが、『ふるさとの民話史話 総合版』（平成16年3月、足立誠太郎著）や『聖岡の里 おおかわち』（平成8年10月、大河内町教育委員会）、『大河内町の昔話』（昭和51年6月、大河内町老人会編）、『おちの里史誌』（平成20年3月、おちの里史誌編纂室編）や『ふるさと猪篠』（昭和58年3月、猪篠地区新しいむらづくり推進協議会記念誌編集委員会編）などの各区で編集出版された地域誌などに整理されている。

ここでは、それらの図書・資料に整理された説話・伝承のいくつかの概要を紹介する。

市原坂のひだる（新田区） 新田区と多可町市原とを結ぶ市原坂は、かつて和紙の原料やこんにゃく玉などを出荷し、米などを買って帰って来る重要な交通路として利用されてきた。ある日、新田の利助さんが多可町へ行った帰り、多可町から8合目程登ったところで腹が減って動けなくなってしまった。「ひだるがつく」といつて、昔この道で飢え死にした人の魂がとりつき、足を動かそうにも誰かが後ろから引っ張って前に進めず倒れ込んでしまった。そこに通りがかった庄屋の九右衛門に腹が減って動けなくなったことを話すと、九右衛門は自分の弁当を開けて、ご飯を一口草むらの中に投げ入れて経文を唱え、残りのご飯を利助に食べさせると、足が動くようになり、無事に家に辿りつくことができたという。そして、それから村人は峠を越して往来する時は、必ず空腹に備えて弁当を少し残しておくことを習慣としたという。

重箱石（作畠区） 作畠区の大歳神社の近くにあり、大きな石が三段に重なっていることから、重箱石と呼ばれている。何らかの事情で村を立ち去った人が、人に知られたくない悩みなどをこの岩に封じ込めたといわれており、重箱石に秘密封じをお願いすると、絶対に世間にもれることがないと伝わる。地域の信仰を仰いできた。

いぼ地蔵（吉富区） いぼ地蔵を祀る堂の横から清水が湧き出ている。この水を「いぼ」につけると、跡形もなく治ると伝えられる。帰り道にふり返ると疑うことになり、効き目がないとされる。この付近は但馬街道の難所の一つで、往来の人たちもこの水を使ったという。同様の伝承をもつ「いぼとり地蔵」は上小田区にもみられる。



いぼ地蔵

からんころんの石（大山区） 大山の村の一本松の下にある居酒屋に、毎晩、からんころんと下駄の音をさせて一升のお酒を買いに来る娘がいた。しかし、娘がお酒を買いに来はじめてから、翌朝勘定してみると、いつも一升分だけお金が足りず、その代わりに木の葉が一枚混じっていた。狐に騙されていると思った居酒屋のおかみさんは、村の若い衆を集めて木刀や木切れを持たせ、お酒を買いに来た娘の後をつけさせた。橋のたもとまで来たとき、急に娘の姿が消えたため、若い衆は消えた場所めがけてなぐりつけた。翌朝、居酒屋の主人と村の若い衆が橋のたもとに行ってみると、傷だらけになっていた石がひとつ横たわっていたという。この石は、現在、七宝寺の門前に運ばれて安置されている。



からんころんの石

石の戸の由来伝説（南小田区） かつて谷川の土橋の上に大きなスギの木があり、その付近にはたくさんの五輪塔があった。ハツ時（午前2時）になると馬が鈴を鳴らして通るといわれ、馬降りと言っていた。夜は道を通る人も少なく、昔の落人の亡靈ではないかとされていた。靈を慰めようと、スギの根元に大きな石で供養塔を建て、僧を招いて村中の人が集まって一日中、大般若経を唱えたという。それよりこの地は石の塔（今では石の戸と書く）と呼ばれるようになったと伝えられる。現在は、開墾や道路整備などにより石の塔も五輪塔もなくなっている。

【参考・引用文献】『ふるさとの民話史話 総合版』（平成16年3月、足立誠太郎著）

『大河内町の昔話』（昭和51年6月、大河内町老人会編）

『おちの里史誌』（平成20年3月、おちの里史誌編纂室編）

『大山の郷 いろりばた』（平成20年11月、「大山の郷 いろりばた」編集委員会）

地域の記憶を受け継ぐ祭り・行事

■ 代表的な祭りや行事

花だんご 毎年 8 月 23 日の地蔵盆に川上区の各組で花だんごをつくり、福田寺境内の「壇の地蔵」に供える行事である。「壇の地蔵」は「安徳地蔵」とも呼ばれ、源平合戦の壇ノ浦の戦い（文治元年（1185））で入水された安徳天皇と平家一門の冥福を祈るために地蔵であり、川上地区の人々による平家落人の救済伝説の中で生まれた行事である。蒸したうるち米を臼と杵で搗き、餅状にして板状に伸ばし、菱形に切る。そして周辺に帯状にはさみを入れて端から丸く巻き上げ、光背状に整形して、中央に「花」の文字を赤色または青色で書く。それを竹串に刺して藁づとに山形にまとめて飾りつける。花だんごは、本村区、大川原区、赤田区、大河区でも実施されている。



花だんご(川上区)

くまびきうち くまびきうちは、川上区に伝わる正月に大歳神社や壇の地蔵などに飾り付ける注連縄をつくる行事で、毎年 12 月第 2 日曜日（以前 12 月 11 日）に行われる。以前は村の男性が宮当人の家に集まって行ったが、昭和 50 年（1975）頃から神社で行うようになった。天井の梁に縄をぶら下げ、藁で人の尻を叩き打ち、打たれる者が逃げ回ることで注連縄を編むユニークな行事であり、アイヌのクマ狩り動作に似ていてことから「くまびきうち」の名がついたと言われている。



くまびきうち(川上区)

獅子舞 中村区と根宇野区の獅子舞は、いずれも寛文年間（1661～1672）に当時、播磨国多可郡松井莊（現在の多可町加美区豊部）から習得して広めたものとされ、以来、明治 3 年（1870）の福本藩廃藩までの 200 年余りの間、毎年正月 3 日に藩主の前で獅子舞を奉納したといわれる。現在は、中村区は埋田神社の祭礼、根宇野区は大歳神社の祭礼で獅子舞を奉納するほか、町内外でも公演して広く伝統文化を伝えている。一方、市原神社の獅子舞は江戸時代後期に近江商人から伝えられたといわれる。第二次大戦中に一時途絶えたが、昭和 52 年（1977）に復活し、毎年 10 月の秋祭りに奉納される。



獅子舞(中村区)

トンボ道中 日吉神社の秋祭りの渡御の際、神輿の余興として寺前区、上岩区、鍛冶区からトンボが出る。トンボとは、男性が花嫁の格好をして長持に乗り、渡御列に加わることである。以前は、長持には屋台を曳く人の飲食物を入れ、人は乗っていなかったが、ある時、酔った勢いで女性の格好をした男性が長持の上に乗ったことがトンボの始まりといわれている。昭和 20 年代には既に行われていたが、いつ頃始まったかは定かではない。



トンボ道中(日吉神社)

守り・育み・活かす

地域に伝わる祭りや行事のなかには、人口の減少や少子高齢化が進むなかで存続が危ぶまれている祭りや行事は少なくない。各区では、開催日の変更や、男の子に限定していた役を女の子も可とするなど、継承のための方法を模索・検討しながら、大切に受け継いでいる。一方で、花だんごを活かしたイベント「かみかわ DE 平家ものがたり」の開催（平成 24 年（2012）6 月）や、市原神社の獅子舞、東柏尾区や赤田区の虫送りの復活などのように、祭りや行事を区民の絆を強めるものとして、地域おこしに活かす取り組みも展開されてきている。

～虫送りの復活（東柏尾区・赤田区）～

虫送りは稲につく害虫を追い払う行事で、平家の武将斉藤実盛が、稲の切株につまずき敵に討たれたのを恨み、害虫になったという伝説に由来し、実盛人形をつくり、松明等をもち、唱え言をいいながら水田を巡り、稲についた害虫を集め、村境まで送り出す行事である。かつては町内の多くの区で行われていたが、農薬が普及すると次第に廃れていった。そのようななか、平成 8 年（1996）には東柏尾区、平成 16 年（2004）には赤田区において、地域おこしを目的として虫送りが復活された。赤田区での虫送りの復活にあたっては、東柏尾区からわら人形の作り方を指導してもらうなど、地域間での連携・協力もみられた事例である。



わら人形(赤田区)

4-3. 歴史文化保存活用区域と保存活用計画の考え方

(1) 歴史文化保存活用区域の考え方

ア. 歴史文化保存活用区域の位置づけ

前項で整理した「かみかわ歴史文化ものがたり」を構成する歴史文化遺産は、町全域に広く分布しており、町全域において歴史文化を活かしたまちづくりの取り組みを展開していくことが基本となる。

その上で、特に優先的・重点的に施策を実施していくことにより、「かみかわ歴史文化ものがたり」の魅力の発信や歴史文化遺産の保存・活用を効果的に進め、神河町における歴史文化を活かしたまちづくりを先導する区域を「歴史文化保存活用区域」に設定する。

イ. 歴史文化保存活用区域の設定指針

「かみかわ歴史文化ものがたり」の重なり状況や歴史文化遺産の集積状況、また、地域での歴史文化を活かしたまちづくりへの取り組み状況等をもとに、神河町として優先的・重点的に施策展開を図ることにより、歴史文化を活かしたまちづくりを町全体に波及させていくモデルとなる区域を歴史文化保存活用区域に設定する。

対象区域の設定にあたっては、取り組みの主な対象とする「かみかわ歴史文化ものがたり」を選定した上で、ものがたりの価値や魅力を一体となって形成する歴史文化遺産の分布ならびに文化的な空間を戦略的・計画的に創出すべき区域を検討して設定するものとする。

ウ. 保存・活用の考え方

歴史文化を活かしたまちづくりの目標（3-1 参照）及び方針（3-2 参照）に従い、その内容を当該区域の実態に即して具体化した保存活用計画を策定し、守り、育み、活かす取り組みを計画的に推進する。

(2) 保存活用計画の考え方

ア. 保存活用計画の作成の目的

前項までに定めた保存・活用の方針や関連文化財群及び歴史文化保存活用区域の保存・活用に関する方針等に基づき、歴史文化遺産及びその周辺環境の保存・活用を実現化するためには、歴史文化の保存・活用に係る多様な主体との協働のもとに様々な取り組みを具体化し、計画的に推進していくことが求められる。

そこで、本構想の考え方に基づき、今後、推進していく保存・活用の具体的な取り組みの内容等を明確にした保存活用計画を策定していくこととする。

イ. 保存活用計画の作成の考え方

○ 保存活用計画の対象

保存活用計画は、歴史文化保存活用区域を対象に作成する。

保存活用計画の対象となる歴史文化遺産は、「かみかわ歴史文化ものがたり」を構成する歴史文化遺産を基本とする。(87 頁「表 4-2 「かみかわ歴史文化ものがたり」の概要」参照)

○ 保存活用計画の作成主体

保存活用計画は、神河町が中心となり、対象となる区の町民や関連する各種まちづくり団体、専門家等と連携・協力して作成する。

○ 歴史文化遺産とその周辺環境の整備の方針

保存活用計画は、本構想に示す各方針に即すものとし、その周辺環境の整備にあたっては、景観行政や農林行政、観光行政等の関連する行政部局との連携のもとに、当該保存活用計画に関連する「かみかわ歴史文化ものがたり」の価値の継承と魅力の向上ならびに地域活力の向上に資するものとする。

○ 保存活用計画に定める事項

保存活用計画には次の事項を定めることを基本とする。

①計画の対象区域

②対象区域における歴史文化の特徴

- ・対象区域に係る歴史や歴史文化遺産の状況の整理
- ・神河町における対象区域の位置付け 等

③歴史文化遺産の保存・管理及び整備・活用の方針

- ・「神河町を特色づける歴史文化遺産」及び「地域を特色づける歴史文化遺産」ごとの、守り、育み、活かすための方針
- ・町内他地域や近隣市町等と連携した守り、育み、活かす取り組みの推進の方針 等

④体制整備の方針

- ・区、活動団体、各種団体、専門家など、当該保存活用計画に係る歴史文化の担い手の状況に応じた、各主体の役割や主体間の連携の方針 等

⑤具体的な事業計画

- ・短期・中期・長期等の各段階に応じた、具体的な取り組みや事業の内容 等

【参考文献】

- ・『神崎郡誌（復刻版）』（昭和 51 年、兵庫県神崎郡教育会）
- ・『神崎郡産業史』（大正 14 年、山林大會協賛會）
- ・『角川日本地名大辞典 28 兵庫県』（昭和 63 年 10 月、「角川日本地名大辞典」編纂委員会）
- ・『日本歴史地名大系 第 29 卷 II 兵庫県の地名』（平成 11 年 10 月、平凡社）
- ・『聖岡の里 おおかわち』（平成 8 年 10 月、大河内町教育委員会）
- ・『福本遺跡調査報告書 I』（昭和 58 年 3 月、神崎町教育委員会）
- ・『神河町文化財調査報告書 第 1 集 神河町の寺社建築-旧神崎町域-』（平成 18 年 3 月、神河町教育委員会）
- ・『神河町文化財調査報告書 第 2 集 福本遺跡調査報告書 II』（平成 20 年 3 月、神河町教育委員会）
- ・『神河町文化財調査報告書 第 3 集 神河町の寺社建築 -旧大河内町域-』（平成 21 年 3 月、神河町教育委員会）
- ・『神河町の歴史文化遺産 I』（平成 24 年 3 月、神河町文化財活性化委員会）
- ・『神河町の歴史文化遺産 II-歴史史料総合調査の成果-』（平成 26 年 3 月、神河町文化財活性化委員会）
- ・『福本遺跡発掘調査概要 福本遺跡のすべて』（平成 19 年、神河町教育委員会）
- ・『大河内町の石仏 第 1 集』（平成 7 年 3 月、大河内町教育委員会）
- ・『大河内町の石仏 第 2 集』（平成 8 年 3 月、大河内町教育委員会）
- ・『大河内町の石造物』（平成 9 年 3 月、大河内町教育委員会）
- ・『路傍の道しるべ写真展』（昭和 63 年、神崎町教育委員会）
- ・『神崎町の石仏』（平成 6 年 3 月、神崎町教育委員会）
- ・『かみかわ百選 ガイドブック』（平成 24 年 3 月、「かみかわ百選」選定委員会）
- ・『歴史訪問シリーズ 第二話 犬寺物語』（神河町観光協会）
- ・『歴史訪問シリーズ 第三話 池田家・福本藩跡』（神河町観光協会）
- ・『神河町の歴史文化遺産 ガイドブック』（平成 27 年 11 月、神河町教育委員会）
- ・『あすの景観をつくる 神河町中村・粟賀町地区歴史的景観形成地区 景観ガイドライン』（兵庫県県土整備部まちづくり局都市政策課景観形成室）
- ・『歴史の道調査報告書 第一集 西国三十三所巡礼道』（平成 3 年 3 月、兵庫県教育委員会）
- ・『兵庫県の伝統文化』（平成 13 年 9 月、兵庫県無形・民俗文化財保護協会）
- ・『兵庫県の近代和風建築-兵庫県近代和風建築総合調査報告書-』（平成 16 年 3 月、兵庫県教育委員会）
- ・『兵庫県の近代化遺産-兵庫県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書-』（平成 18 年 3 月、兵庫県教育委員会）
- ・『兵庫県版レッドデータブック』（兵庫県版レッドリスト 2010～2014）
- ・『旧生野鉱山寮馬車道（推定地）試掘調査実績報告書』（平成 18 年度、兵庫県教育委員会）
- ・『兵庫の森林土木史』（平成 17 年 12 月、社団法人兵庫県治山林道協会）
- ・『兵庫自治学 第 15 号』「集落単位の地域づくり「神河町地域サロン事業」～地域力の向上を目指して～」（兵庫自治学会）
- ・『大河内町風土記工学研究報告書』（平成 15 年 3 月、富士常葉大学附属風土工学研究所）
- ・『神東神西郡沿革考』（明治 29 年、大杉兵太郎他）
- ・『ひょうごの地形・地質・自然景観』（平成 10 年、田中眞吾・中島和一）
- ・『日本山岳ルーツ大辞典』（平成 9 年 12 月、村石利夫）
- ・『なつかしの山やま ひょうご低山遍歴』（平成 2 年 12 月、多田繁次）
- ・『ふるさとの民話史話 総合版』（平成 16 年 8 月、足立誠太郎）
- ・『大河内町の昔話』（昭和 51 年 6 月、大河内町老人会）
- ・『播磨 山の地名を歩く（姫路文庫 8）』（平成 13 年 12 月、播磨地名研究会）
- ・『播磨の地理（人文編）』（平成 5 年 4 月、田中眞吾）
- ・『播磨國風土記』（平成 17 年 10 月、沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉編著 山川出版社）
- ・『水と緑のパワーステーション 大河内発電』（関西電力）
- ・『但馬の情報誌 T2 vol.74』（平成 22 年 4 月、財団法人但馬ふるさとづくり協会）
- ・『プロジェクト未来遺産 銀の馬車道』（平成 27 年 3 月、銀の馬車道ネットワーク協議会）
- ・『プロジェクト未来遺産 銀の馬車道商品ガイド』（銀の馬車道ネットワーク協議会）
- ・『おちの里史誌』（平成 20 年 3 月、おちの里史誌編纂室）
- ・『みよの ふる里の歴史文化財探訪』（平成 20 年 10 月、みよの地域サロン）
- ・『播磨・福本史誌』（平成 15 年 7 月、福本歴史文化研究会）
- ・『寺野区の歴史とロマンの旅』（平成 18 年 12 月、寺野区）
- ・『わが ふるさと 柏尾 愛宕山法性寺』（平成 19 年 3 月、柏尾区）
- ・『記念誌 よしとみ』（昭和 60 年 3 月、吉富地区新しいむらづくり推進協議会）
- ・『大山の郷 いろりばた』（平成 20 年 11 月、「大山の郷 いろりばた」編集委員会編）
- ・『ふるさと猪篠』（昭和 58 年 3 月、猪篠地区新しいむらづくり推進協議会記念誌編集委員会）
- ・『ふるさと寺前-80 年のあゆみ-』（昭和 61 年 10 月、小寺茂）
- ・『せんれい』（かみかわ銀の馬車道まちづくり協議会）
- ・『中村・粟賀町ふるさとまちづくりだより』（かみかわ銀の馬車道まちづくり協議会）
- ・『第 1 次 神河町長期総合計画 基本構想』（平成 19 年 3 月、神河町）
- ・『神河町バイオマスタウン構想』（平成 22 年 2 月、神河町）
- ・『神河町再生可能エネルギー基本計画』（平成 26 年、神河町）
- ・内閣府経済社会研究所ホームページ／生活者の観点からの地域活性化と団塊の世代対策の取り組み事例
- ・環境省ホームページ／里地里山保全再生 事例文献データベース
- ・神河町観光協会ホームページ

神河町歴史文化基本構想

発行日／平成 28 年（2016）3 月

発 行／神河町教育委員会
兵庫県神崎郡神河町寺前 64 番地
電話 0790-34-0212

印 刷／ウニスガ印刷株式会社
西脇市和布町 39 番地
電話 0795-22-3226